

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

高等学校レベルのL3教育：
集中講義形式のスペイン語教育を通じた
英語能力の向上とグローバル人材の育成

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: KISHIDA, Saori メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2551

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



博士論文審査等報告書

1. 出願者 外国語学研究科文化交流専攻【 言語 】コース

ふりがな

氏名 岸田早織

2. 論文題目

高等学校レベル L3 教育：集中講義式のスペイン語教育を通して英語能力向上とグローバル人材の育成

3. 審査委員

主 査： サンス モンセラット ㊦

副 査： 成田 瑞穂 ㊦

副 査： 川口 正通 ㊦

副 査： 田浦 秀幸 ㊦

4. 博士論文審査の要旨

岸田早織氏の博士論文最終試験は2021年2月9日午前10時30分から、神戸市外国語大学にて実施され、モンセラット・サンス（主査）、成田瑞穂、川口正通の3名の本学教員と立命館大学言語教育情報科学研究科の田浦秀幸教授が審査に当たった。審査は公開でおこなわれ、申請者と本学教員は対面形式、外部審査員はオンライン形式での参加となった。

試問に先立ち、申請者は論文内容について口頭発表を行った。論文の3つの柱となっている、日本人高校生向けの言語教育に関する次の仮説を詳説し、これらの仮説に基づく実験とその結果分析をまとめたものである。

1. スペイン語の形態的、統語論的および音韻の特徴を考慮すると、スペイン語を学ぶことは日本語話者の高校生の英語習得過程にポジティブな影響を与えることが期待できる。英語習得には、動詞活用や名詞複数形といった形態素の理解は不可欠であるが、これらの形態統語論的特徴は、英語に比べスペイン語でより強く視覚的にその変化が現れている。したがって、スペイン語を学ぶことを通じて英語学習においても形態素への意識が強くなり、その習熟度を高めることができるはずである。この仮説を裏付けるために、申請者は神戸外大の学生を対象とする予備実験および神戸外大のキャンパスで高校生を対象に4回のスペイン語集中講義を実施した。スペイン語講座の開始前と終了時に英語のテストを課したところ、定冠詞、人称及び数の一致に関するエラーの改善が顕著に見られ、仮説が実証された。

2. 日本の高校生に対する第3言語教育は集中講義形式が最適である。大学入試に必須ではない科目に時間を割けないこと、集中講義形式の言語教育が、その後の継続的な言語習得の入り口になりうるものがその論拠である。申請者は集中講義形式のスペイン語講座を音声スキルに限定したオーラルアプローチ（教室での日本語、ノート筆記を禁止）で実施した。
3. 文部科学省が高等学校教育に期待するものとして「グローバル人材の育成」がある。言語教育という観点から考えると、それは英語を含む複数の外国語を、その背景となる文化も含め習得・理解している人材を指す。スペイン語は、中国語に次いで話者人口世界第2位にランク付けされている。高校生が英語に加え、スペイン語を学ぶことで、文部科学省の多言語および多文化を理解する国民の育成という目標が達成できるのではないか。

諮問において審査員は、研究の独創性、着眼点の斬新さを高く評価した。関連する先行研究では、外国語教育および習得は母語あるいは既知の第2言語（L2）による第3言語（L3）への影響に着目されている。その状況において、L3 スペイン語が、学習者がまだ英語（L2）の初心者レベルにある段階にポジティブな影響を与えうるという着眼点は非常に斬新であり、本論文の外国語教育研究への貢献は多大なるものがある。本論文は序章、日本の英語教育について述べる1章、スペイン語集中講座の実践と英語テストの結果分析を詳説する2章、言語教育のあらたなる可能性として集中講義形式を提案する3章、さらに結論および日本の外国語教育の展望を述べる4章からなる。博士論文としての形式に則ったもので、内容的にも、体裁としても申し分のないものであると判断できる。また、客観的な視点を失うことなく、実験で得られた結果はデータ収集数の少なさからも「ケーススタディ」であることを指摘し、自己批判している点も評価できる。

さらに審査員からは、以下の項目について指摘・質問があった。

統計・分析手法に関して：申請者による分析によって証明された結果はゆらぐことはないが、使用された統計分析法は適切ではない。データは、ノンパラメトリック手法に従って再分析する必要がある。この点は論文の最後版を提出する前に解決しなければならない。（再分析は、神戸外大の統計専門家の助力のもと、現在すでに行われている）。また、分析のために使用した文法項目はどのような論理をもとに採用したのか論文内で明確にする必要がある。

理論の明晰性に関して：この論文では、学習/習得の区別にして SLA 文献の議論論理的根拠をおいているが、これらの用語について十分に議論および定義されていない。生徒が無意識的に言語運用を改善したと言えるのか、あるいは英語の機能についての理解を深めたと言えるのかを検証し、それが申請者の定義する学習/習得のどちらに相当するのか検証すべきである。さらに得られたデータ結果がこの研究にどのように貢献しているかをさらに議論し、加筆するよう助言があった。また、スペイン語から英語への「negative interference」にもつながる可能性があるのかという質問が出され、申請者はその可能性についても今後の研究に組み込みたいと述べた。

論文が網羅する研究分野の多様性に関して：このような斬新な研究では、さまざまな研究分野の基礎的理論を検証し、論文の妥当性を証明するために関連するトピックを取り上げる必要がある点は理解できる。しかし論文における焦点が分散してしまい、主張の説得力が弱まり、論文読者を混乱させる可能性がある。教育法と教育制度を分離させて論じるため、第4章の扱いについて再考が促された。

上記のとおり、審査員からはさまざまな講評、内容に踏み込んだ忌憚のない意見が数多く述べられた。申請者は質問に対しては真率に解答し、主張すべき点は適宜主張し、指摘された修正点や助言については実直に受け入れた。

公開審査後、審査委員4名で協議を行った。それぞれの講評と評価を再確認し、本論文が本学大学院文化交流専攻の学位を授与するのに十分な価値があることを審査員全員が認め、最終結果を「合格」とすることに決定した。

- | | | | | | |
|----|----|------------------|--------|--------|--------------|
| 4. | 5. | 論文成績 | _____点 | 最終試験評価 | _____合格_____ |
| 5. | 6. | 授与する学位(付記する専攻分野) | | | |
| | a. | 博士() | | | |